

こころせい

第10号

平成18年 4 月

発行所 医療法人山口会

発行者 山 口 継志郎

◆ 高知厚生病院の理念 ◆

高知厚生病院の理念

- 1 私たちは、医療を通して患者さんと家族、更に地域の皆様の幸せのために努力します。
- 2 私たちは、心と心が通い合う、温かい医療を目指します。
- 3 私たちは、更に大きくお役に立つために、発展向上を目指します。

豊かないのち講演会を終えて

副院長 山口 龍彦

聞きしに勝る河合隼雄長官

2006年3月12日は私にとって忘れられない日となりました。それは、文化庁長官を務めておられ、日本の臨床心理学の第一人者でもある河合隼雄先生をお迎えして、高知緩和ケア研究会の恒例の行事である「豊かないのち講演会」を開催できたからです。

当日は、約400名の聴衆が河合先生の巧みな話術にハマって、共に笑い、共に泣き、そして共に「いのち」や「たましい」について考えることができました。そのご講演の内容を中心に、私が河合隼雄先生から学んだことを少しお伝えしたいと思います。河合先生はとても気さくな方です。打ち合わせのときに「河合先生は毎年2回も高知に来られて講義をされているそうですね。」と申し上げますと、「他の県の人から高知にはよく行くのにどうしてうちには来てくれんのか、なんて言われるものですからね、私は、仕方ないんや"こうちトレーニング"にかなあかんのやから、と言ってやるんですわ。」とのこと。

臨床心理のお仕事も続けながら、つまりカウンセリングのクライアントを抱えながら、たくさん本も出版するし、世界各地で講演もされ、さらに文化庁長官でもあるという世界で最も忙しい人の一人である河合先生が、私たちのために高知に来て下さったということは実はスゴイことであると思って緊張していた私の気持ちをほぐして下さいました。

私は河合先生のご講演を聴きに来て下さった方々にたいして、次のように先生をご紹介しました。

「私たちが、ホスピスの現場で患者さんやご家族のケアをしていてたましいの苦しみが確かにあることは知っています。それで、どのようにすればその苦しみを和らげてさしあげることができるのか、という問題について、私たちはずっと悩みながら、なんとかしたいと勉強し続けているわけです。この問題に、宗教からではなく、学問の立場からお答えいただくのに最も相応しい方が河合隼雄先生だと思っています。心理学の立場から、特にユングの流れを汲むお立場から、心をずっと見つめてこられて、「たましいの癒し」を日々実践されておられる方が河合隼雄先生です。今日は「心とたましい」について、私も皆様とともに、決して頭ではなく、心の耳で拝聴させていただきたいと思っています。それでは、河合先生よろしくお願い致します。」

河合先生は「たましい」という演題で話すのは初めてなので、チャレンジと思って楽しみにして来たこと、集まった聴衆にたいして顔を覗ながら一番その場に相応しい話をするので、これはカウンセリングと同じで録音禁止としたこと等を述べられた後、いきなり結論から入ってこられました。

あるクライアントが河合先生に「先生、魂はあると思いますか？」と質問された時のこと。このときの河合先生の答えは「あると思った方がよいと思うことがたくさんあるよ。」だった由。

別のクライアントの語ったことば。「僕は自殺しようと思ったのです。でも、考えてみると、僕は自殺すると、自分で自分の体を殺してしまうことはできるのだけれど、魂は殺してしまうことはできない。魂を殺せないんだったら、自殺しても仕方がないので自殺は止めました。」河合先生は「魂がある」とは学者としては言えないのだけれど「あると思う方が良い」ということははっきりしているというお立場です。

さらに河合先生の友人でアメリカの心理学者ヒルマンは魂を大切にしている学者で、さらに突っ込んで「魂があると言う見方で自分の人生観を創っていこう」という立場であると教えてくださいました。(ヒルマンは邦訳「魂のコード」の著者。ちなみに私は三分の一読んで、難しいので積ん読中。)

『西洋では「神と人間」「光と闇」「天と地」など分けていくことで自然科学が発達したが、私と関係がない区別した現象だから科学できるのであって、「私」の問題については科学できない。つまり、宇宙船で月に行ける科学の時代に、不登校の息子を学校へ行かせる科学はないということ。これにたいして、東洋では区別しない。禅の瞑想などでも、眠るのではなく明晰さを失わずに意識のレベルを下げると自分と他とを区別しない「存在」としかいいようのない世界が現れてくる。一人ひとりの心の中に全ての宇宙が含まれている。そこに、一人ひとり(人間だけではなく)を大切にする精神がある。』この部分は深遠で、とても解説しながらお伝えできる力にはありませんが、河合先生が語るさまざまな事例や、愉快的な例え話に夢中になりながら、お話しをお聞きしているときは分かったような気になっていたのが不思議です。

人と人が会うときに、心も体も共にいることが癒しにつながっていくそうです。医療の世界は体のケアを通して魂のケアができる世界でもあります。自分のたましいが相手を優しく包み込むような思いで一人ひとりの患者さんに接することが大切だと教えていただいたと思っています。

最後に、伊勢物語にある有名な和歌、

ついにゆく 道とはかねて聞きしかど

きのう きょうとは 思はざりけり

人生には終わりがあことは、皆知っているのですが、その時が来てみないと「今がその時」と分からないし、その準備をしようと思う人もあまりいないようです。そこで、河合先生は、あるビジネスマンの集まりで、この歌の上の句はそのままにして、下の句を自分なりに考えて作ってもらったそうです。皆さんならどう作りますか？

河合先生ご自身は

聞きしに勝る この花吹雪

と作られました。河合先生の畏友である白洲正子さんが危篤になり、一度息を吹き返してそのときの情景を教えて下さったそうですが「ふと気が付くと一人で山道を歩いていた。見ると桜並木が満開で、その花吹雪の中を、何とも言えない幸せな気持ちであるいていた。」という臨死体験だったそうです。そのことを聞いていたものだから、自分のときもそうかなと思って作られたとのこと。私も作ってみようといろいろと考えましたが、この下の句には勝てそうもないので、私も是非そうありたいもの

院内探検

高知厚生病院 医事・経理課 ご紹介

病院を訪れる方には患者様だけでなく、さまざまな方がいらっしゃいますが、多くの方が最初に受付にいらっしゃいます。その窓口で働いている事務員が私たち『医事・経理課』の職員です。病院の窓口である医事・経理課では皆、一丸となり「心と心が通い合う、温かい医療」という病院の理念の元、病院の顔としての自負をもって日々働いています。微力ではありますが、不安を抱えてお越しになる患者様のお力になる事、お見舞いやお仕事のためにご来院された方々がスムーズにその目的を達成されます事が私たちの願いであります。私たちはその願いを実現する為の努力を惜しみません。

◆ 受付について

患者様がお越しになった時にまず受付をして頂きます。

受付をした時点でどなたが何科のどの順番かを把握する事で受付順番の誤りを無くしています。保険証の確認もこの時にさせていただきます。他には書類の受付や、診察受付を済まされた患者様のカルテを各診察室へ搬送したりしています。

◆ 会計について

患者様に一部負担金をお支払い頂く為に、医療費を計算し、その計算を元に負担割合に応じて一部負担金をお支払い頂きます。正確かつ迅速な処理により、患者様の待ち時間がより短くなるよう心がけています。又、領収証は個別の費用ごとに区分されています。ご不明な点がございましたらお問い合わせ下さい。

◆ 診療報酬の請求について

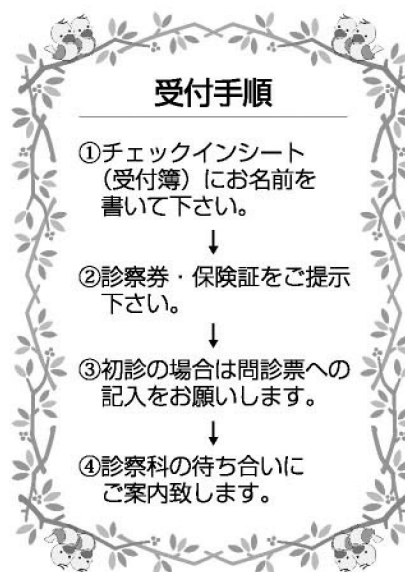
一部負担金を患者様に窓口でお支払い頂く事は前述いたしましたが、残りを病院から患者様が加入している各保険者に毎月請求致します。この業務を診療報酬請求業務といい、毎月初めの定められた期間のなかで正確に済まさなければなりません。

◆ 診療録（カルテ）の管理

カルテは『患者様一人1カルテ』で作成しています。これを毎日の業務で使用したり、使用后直ちに正しい保管場所に戻したりします。この業務に不備があると患者様に提供する医療行為に遅延が生じたりして円滑な業務に支障が出てしまいます。業務自体はシンプルなものですが、重要な個人情報ですから絶対にミスを生じさせないように細心の注意を払って業務を行っています。

他には電話の取次ぎや、書類や郵便物の取り扱い等たくさんの業務がありますが、そのどれもが円滑な診療を患者様に提供する為の大切な業務です。

一人では微力な我々ではありますが力を合わせて皆様のお役に立てる様努力しておりますのでどうぞよろしくお願い致します。
何かありました際にはお気軽に声をお掛け下さい。



研修・訓練

消防訓練

3月14日高知東消防署と合同訓練が行われました。夜間の火災発生時の避難訓練と消火器訓練が行われました。



院内行事

春祭り

3月15日に5Fレストランにて、3F病棟通所リハビリ合同の春祭りが開かれました。おしどり会の皆様により、歌や踊り、皆で草津温泉の湯もみ歌を歌ったりしてたのしく過されました。



お花見

3月27日月曜日に通所リハビリテーションのご利用者様と土佐国分寺に花見に行きました。四国八十八ヶ所巡りの第二十九番霊場であり、お遍路さんの鈴の音が絶えず、満開の桜をなんともいえない穏やかな気持ちで眺めてきました。



リレーエッセイ

看護部長 岩本泉



広報誌こうせいでリレーエッセイをはじめようということになった。誰が口火を切るかという段になり、すごく上手な人では後が続かない恐れがあるので…と私が手をあげた。何しろ今年度の個人的な目標は「表現力を高める」だから。「私が看護師になったわけ」というテーマで書くことにした。平成18年3月31日の今日、窓から見える青い空と満開の桜の花をながめていると色々な事が思い出されてくる。

私の記憶の中で一番古い看護は母に対してのものだと思う。当時9才だった私は週末になると車で3駅ほど離れた町へ入院している母を見舞うために一人でかよっていた。校門を出てしばらく歩くと橋があった。その橋の上から斜め左下を見ると川の上に小さな駅がある。駅のホームには桜の木が植えられており満開だった。

母に会えるという嬉しさとその母は病気で入院しているというその頃の不安定な気持ちがいまだに満開の桜を見るたびに甦ってくる。ある日いつものように左半身だけ母のベッドにもぐりこませ甘えていた。どういいうきさつでそうなったのかはよく覚えていないが、母の排尿介助をすることになった。高いベッドと浮腫ではれていた母の脚を支えての介助は幼い私には困難だったと想像するが、看護師さんか母かのどちらかに言われたとおりの手順で行い上手く行えた。その時、母が私に「上手にできたね。一番気持ちよく済ませたよ。」と言った。私の母への看護がこの時1回きりだったのかその後も何回かあったのかも覚えていない。母との記憶はほとんどないがこのとき褒められたことはよく覚えている。その後しばらくの療養後36歳で母は亡くなった。この頃から看護師になろうと考えていたわけではないが遠い記憶の片隅に褒められたことが心地よく残っていた事は確かである。先日、高名な方とお話しする機会があった。その方も学生の頃に苦手だと思い、辞めていた楽器を60歳過ぎて始めてみたところとても褒められたそう。「人間は褒められるとなんでもできる気になるものです。」と話されていた。あ、そうか私も褒められてこの職業に就いたのかもしれないなと思い至ったわけである。

次回は通所リハビリこうせい所長 宮脇健二さん おねがいします。

編集 後記

院内のちょっとした気配りが心を和ませてくれる、でもだれの配慮かわからないことってありますよね。この可愛い一輪挿し…北の玄関にあります。格闘技大好きスタッフが毎日お世話してくれています。院内を探索していると意外な発見があって、楽しいものです。

